

緑内障 3 分診療を科学する！ 症例に学ぶマネジメントの実際

吉川啓司, 松元 俊 編

多治見スタディなどによる社会的啓発が進み、眼科外来における緑内障患者は増加している。日本緑内障学会は、緑内障管理の標準化を目指し、緑内障診療ガイドラインを発行している。ガイドラインではペースラインを見極め、目標眼圧を設定し、治療効果を確認しながら治療を進める手順を示してあるが、実臨床では初期治療で目標眼圧を達成できる症例は半数にも満たず、過半数の症例はガイドラインからはずれた管理を当初からはじめねばならない。限られた診療時間内で、個々に異なる症例に対していかに納得できる治療を提供するか、その手がかりを具体的に示してくれる情報源は少ない。

このような眼科医の欲求不満を解決すべく、エビデンスに裏付けられた標準化された方針を踏まえて、個々の症例に最も現実的で柔軟な対策を打ち出すにはどのような思考過程を踏んだらよいかを、実際の症例をもとに提示しようというのが編者の意図である。

この目的に沿って本書は“緑内障マネジメントのツール”、“緑内障マネジメントのデータ収集”というインフラとしての基礎知識と検査法の簡潔なまとめにはじまり、原発緑内障の実際の症例を呈示、解説する“症例に学ぶマネジメント”、続発緑内障主体の“専門家に訊くマネジメント”という本論に入り、最後に“緑内障マネジメントのワンランク・アップ”、“緑内障点眼薬の背比べ”という実臨床におおいに助かる診療のこつや薬剤の一覧表で締めくくられている。

最大の売りは“症例に学ぶマネジメント”、“専門家

に訊くマネジメント”の項にある。日常頻繁に遭遇し、その度に対処に迷う症例がことごとく細かに条件を変えて提示されている。症例毎に取りあえぬ治療選択に至る思考過程とそのエビデンスが記載されている。次いでそれ以外の対案、批判、今後起こりうる事態も載っていて、さあ、あなたならどうすると問いかけてくる。著者が異なるのでそれぞれに、エビデンスの生かし方にも特徴があっても面白い。エビデンスが繰り返し引用されているために本章を読むだけで自然にエビデンスが記憶に刷り込まれてしまう。過去の自分の症例を思い起こし、「あのときはこうしたが今度はこういう手もあるな」と新しい道がみえてくる。見事に編者の初期の目的が達成されている。

それぞれの頁が質のよい美しい写真と簡潔な文章で解説されており、講演を聴くようで読みやすい。手に取りやすいサイズで、仕事の合間にも気楽に目を通すことができる。

本書を読むと多くのポケットを身につけたような気になる。次の患者に対し、さて、どのポケットから対策を出してこようかと楽しみになる。そんな自信をつけさせてくれる書物である。

神戸大学大学院器官治療医学講座眼科学
根木 昭

●B5 頁 240 2006 年

定価 9,240 円（本体 8,800 円＋税 5%）

[ISBN4-521-67661-8] 中山書店刊